

Title	第三世界觀的人格典型
Author(s)	米田, 庄太郎
Citation	經濟論叢 (1935), 41(2): 187-206
Issue Date	1935-08-01
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/130621">https://doi.org/10.14989/130621</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號二第 卷一十四第

行發日一月八年十和昭

## 論叢

生産の構造……………文學博士 高田保馬

寺院と課税……………法學博士 神戸正雄

第三世界觀的人格典型……………文學博士 米田庄太郎

## 時論

最近に於ける産業組合金融の動向……………經濟學博士 八木芳之助

## 研究

フランス帝國經濟會議……………經濟學士 松岡孝兒

産業的<sup>流通に於ける</sup>營業貨幣の流通速度……………經濟學士 中谷實

マークン時代<sup>の</sup>海運政策の典型……………經濟學士 明石巖三

商業生産説の諸性格……………經濟學士 松井清

## 說苑

希臘人の「植民」觀……………農學士 若木禮

中小經營の弾力性に就いて……………經濟學士 岡倉伯士

## 附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

## 第三世界觀的人格典型

米田庄太郎

私は本雜誌本年五月號に公せる拙稿「第三史觀の可能性」(下の七)に於て特に「哲學の第三根本方針」に就て論述するつもりであつたが、紙面の都合上已むを得ず、之を次の拙稿「第三史觀の根本原理」の始めに論述する様述べて置いたのである。然るに其後健康勝れず「第三史觀の根本原理」の原稿を書き上げることが出来なかつたのであるが、此頃夫れに着手するに當つて、其の拙稿の始めに此の問題を論述するに於ては、第三史觀の根本原理其物を豫期して居るだけ論述する紙面がなくなるので、已むを得ず此の問題の論究を、本論文として別に公にすることとしたのである。

私は本雜誌本年四月及び五月の兩號に於て公にせる拙稿「第三史觀の可能性」(六)「世界觀的人格典型說」中に述べし如く、從來一般に、又今日も一定の方面に於ては尙ほ汎く行はれて居る處の、哲學の根本的方針は觀念論と唯物論との二者であると見る見解は、兩者の何れかの一を正當と認め、他を排斥せんとするに於ては誤つて居るが、併し兩者は、私が世界觀的人格典型と稱せんとするものの二つの根本的典型に基いて發展する哲學の、根本的な二つの方針であると見るに於ては、正當であるかと考へると同時に、哲學の根本的方針を只其等の二者に限り、夫れ以外には何等の根本的方針も全く存在しないと見るのは、誤つて居ると考へるのである。それで私は本論文に

於ては、哲學史や、現今の哲學を考察して、其等二つの根本的方針の外に、第三の根本方針の可能なを事實上指示し、又其の第三の根本方針は、第三の世界觀的人格典型に基いて、當然發展す可きものなるを論究したいと思ふ。

今觀念論と唯物論との二つの根本方針に對して、第三の根本方針と稱し得られるものの概念を、最も廣く一般的に規定するに於ては、精神と物質との兩者は同等に原本的な究極的實在にして、且つ之を總合する根元的なものは存在しないと見る物心二元論も、此の根本方針に屬するものと認め得られる。併し私はかゝる二元論は、精神的に發達せる現代人の世界觀的欲求を到底満足させることの出来ないものとして、此處では考察に入れないこととする。しかも尙ほ哲學の第三根本方針の概念は、私がさきに指示して置いた意味、即ち觀念論と唯物論との二方針を直接に總合しようとする最高の方針と云ふ意味よりも、より廣い意味に解し得られる、又そう解するのが、一般的考察の見地から見て、より多く正當であると思はれる。と云ふのは、汎く哲學史を考察すると、殊に現今の哲學を注意深く考察すると、私自身の意味するが如くに、直接に觀念論と唯物論との二方針を總合しようとするのではなくして、右の二方針の區別或は對立には頓着せず、又は之れに囚はれずに、別な方面から出發して哲學的に思索し、そうして間接に或は結局は、右の二方針を總合せんとする傾向が發見されるが、殊に現今の哲學に於て此の傾向は大に發達し、勢力を振ふて居ると思はれるが、かゝる傾向も觀念論と唯物論との二方針に對しては、ヤハリ第

三の根本方針と見做さる可きものと思はれるからである。それで私は此處に、第三の根本方針の概念を、私が嚴密な意味に解するものの外に、右の傾向をも含む廣い意味に解して、之を考察したいと思ふ。但し私は此處に哲學の第三根本方針の概念を右に述べしが如き廣義に解し、かゝる方針が哲學史上、殊に現今の哲學に於て如何なる形態にて發達して居るかを指示し、且つ之を批判したいと思ふが、併し中世紀哲學史や、更に古代哲學史にまで遡つて考察する暇はないから、只近世哲學史及び現今の哲學に就て考察するだけに止める。尙ほ夫れも私が知る範圍内に於て、最とも重要と認める若干の哲學に就て、極一般的に考察するだけに止めざるを得ない。

## 二

却説近世哲學史に於て、私が知る範圍内に於て、上に述べしが如き意味にて、私が哲學の第三根本方針と稱するものを發展させたと思はれる哲學中にて、此處に特に注目したいと思ふのは、スピノツアの哲學とシェリングの哲學とである。

私は近世哲學史上、私が哲學の第三根本方針と稱するものを、最とも明かに示して居るとして先づ注目す可きは、スピノツアの哲學であると思ふ。實にスピノツアは唯物論と觀念論或は唯心論との赤裸々な對立を、一の新しき第三者によりて、一の特異な一元論によりて總合しようとする、廣大な哲學體系を建設しようとした、近世哲學史上の最初の大哲學者であると思はれる。併し彼は實質上果して、吾々が切望するが如き第三根本方針の哲學體系を、正當に建設して居たの

であるか。此處に此の問題に就て、詳しく論述する暇はないから只極簡單に述べるだけに止めるが、彼はデカール哲學に於て相並立する二つの實體と認められて居た思惟と延長或は精神と物體とを、唯一の實體即ち神の二つの屬性と觀たのであるから、形式上では、精神と物質とを總合する最高唯一の實在を指定すると云ふ意味にて、第三根本方針を正當に發展させて居る様に思はれるのである。併し彼が最高唯一の實體と觀て、神とか、自然とか稱して居るものは、實質上如何なるものであるか、又彼は最高唯一の實體の二つの屬性と認めた思惟と延長或は精神と物質との關係を、如何に考へて居たかを吟味して見ると、彼の哲學は形式上第三根本方針を發展させて居るものと見做し得られるが、併し實質上到底吾々の第三世界觀的要求を満足させるものでないことが、覺られると思はれる。要するに彼が實體と稱して居るものは、一方から見れば或マルクス主義唯物論者が解するが如くに、つまりは物質を意味するものに外ならぬと解することも出来るが、併し彼の宗教哲學、心理學、倫理學、國家學等を參照して、全體的に考察すると、私は彼の實體なるものは、つまりは物質を意味するよりも、より多く精神を意味するものであらうと考へるのである。又彼は思惟と延長或は精神と物質との根本的關係を、一定の平行關係と認め、「觀念の秩序は物の秩序と同一である」、即ち一切の精神的なものには一の身體的なものが對應し、逆に一切の身體的なものには一の精神的なものが對應すると解し、かくて心意と身體、精神と物質との間に只對應關係を認めるだけであつて、更に進んで兩者の間の深奥な相互作用を認めて居ない。處

でかゝる見解からしては、現實な人類の歴史的發達は、到底正當に把捉し得られるものでない。かくて私はスピノツアの哲學は、形式上第三根本方針を發展させたものと見做し得られるが、併し實質的には吾々の切望するが如き第三根本方針の哲學を建設せるものでなく、隨ふて第三史觀の哲學的基礎を確立するものとは、認め得られないと考へるのである。

甚だ簡單であるが、私は以上述べし如くに、スピノツアの哲學は形式上では第三根本方針を發展させ、如何にして第三根本方針は可能であるかを指示して居ると考へると同時に、實質的には彼の哲學はまだ第三根本方針の眞の哲學或は世界觀ではないと考へるのである。然らばシエリングの哲學はどうであるか。

シエリングがスピノツアの影響の下で建設せる絶對的同一體系或は同一哲學なるものは、スピノツアの哲學と同じく、やはり形式上では第三根本方針を發展させたものと認め得られる。シエリングの論ずる處によれば、一切の實在の最後の基礎は絶對者或は絶對的理性にして、そうして其の絶對者は夫れの本質に於て自己認識であり、かくて主觀と客觀との對立、或は觀念性と實在性との對立、或は精神と自然との對立の自己指定である。絶對者は夫れの自己指定に於て、夫れ自身と全く同一的にして、かくて兩方面或は精神と自然との何れに於ても、他に於てよりもより多く指定されて居ない。併し絶對者の一切の個別的諸現象に於ては、甚だ相異なる諸關係に於て、自然か又は精神かの何れかゞ、より多く表はれて居ると云ふ量的差別が存立する。しかも自

然と精神との兩方面の全體に於て、均衡が保持されねばならないから、實存するものの終りなき系列に於て、何物も夫れ自身で存在し得ず、只全體の一部或は一方面としてのみ存在し得るのである。されば現實的なものありては、自然的要素か又は精神的要素かの何れかゞより多く優勢であるから、一切の現實的なものは實在的系列か又は觀念的系列かの何れかに、かくて自然の世界か又は精神の世界かの何れかに、屬して居るのである。又終りなき現實態と絶對者との關係は、一の時間的生起或は原因生として考へらる可きでなく、無限なもろくの差別の中に絶對的無差別が、即ち夫れ自身との絶對者の同一性が現はれて居る。かくて世界全體は一の有機體の統一性、或は一の藝術作品の統一性を有するのである。又一切の諸差別或は展相は(Potenzen)單に絶對者の客觀的發展諸形態であるだけでなく、更に同時に絶對者のもろくの自己直觀、絶對者のもろくの理念であるのである。

甚だ簡單ながら以上述べし、シェリングの同一哲學の根本思想によりて考ふれば、夫れはやはり形式上では、第三根本方針を發展させて居るものであることは明かである。又實質的に見れば、精神と自然或は物質との關係に於て、一定の相互作用を認めて居ることによりて、スピノツァ以上に進んで居ることが覺られる。しかもまだ十分でない。更に彼の絶對者或は絶對的無差別なるものは、スピノツァの實體よりも以上に明かに、精神的なものであることは、彼は絶對者を絶對的理性と稱して居ることや、一切の展相は絶對者のもろくの自己直觀、理念であると見て居る



ことなどによりて、更に彼が同一哲學を唱へる以前に唱へて居た自然哲學及び先驗的觀念論や、其の以後に唱へて居た所謂實證哲學なるものなどを參照して、彼の哲學的生活の全體を考察することによりて學ばれると思はれる。要するにシェリングの同一哲學も、形式的には第三根本方針を發展させて居るが、實質的には甚だ不満足なものと思はれるのである。

却説私は近世哲學史上、形式的には大體上第三根本方針の可能性を指示するが、併し精神と物質とを總合する根源的な最高實在を、結局は精神的なものとするに歸着するが故に、實質的にはまだ第三根本方針を正當に發展させたとは認め得られない哲學體系の、最も重要な代表者として、スピノツアの實體哲學及びシェリングの同一哲學を、甚だ簡單ながら上に述べし如くに考察し、評價したのであるが、更に同じく形式的には大體上第三根本方針の發現を指示するが、併しスピノツアの實體哲學や、シェリングの同一哲學が代表する種類のものとは反對に、精神と物質とを總合する根源的な最高實在を、結局は物質的なものと觀るに歸着すると思はれる種類のものを代表する哲學的一體系として、スペンサーの總合哲學をあげて置きたいと思ふ。

スペンサーの論ずる處によると、吾人の思惟は種々の方面からして、吾人を一の最後の實在、絶對者又は力と稱せらる可きものに導いて行く。併し其の最後の實在、絶對者或は力の最も深奥な本質は決して吾人に開示されない、即ち不可知なものである。そうしてかゝる最後の不可知的なものを承認することによりて、宗教と學問との融和の唯一の可能性が與へられる。但し最

後の實在、絶對者、力の存在は不可知的であるが、併し夫れの生成は認識し得られるのである。かくて科學は此の生成の部分的に統一的な知識にして、哲學は夫れの完全に統一的な知識である。そうして一切の學問的思惟の基本的諸前定或は先天的眞理は、物質の不滅、運動の持續及び力の保存である。かくて全世界過程は物質と運動との、進化と分散との、生と死との絶へざる再分配或は分配變更に於て存立し、そうして進化とはつまり全體の不連結的狀態から連結的狀態への移り行き、即ち集結と、之れと結び附いて居る處の、全體の諸部分の不判明な同質性から判明な異質性への移り行き、即ち分化とを意味して居る。そうして一の現象を説明するとは、つまり右の如き進化の一部として、其の現象を認識することを云ふのである。

スペンサーの總合哲學の根本思想は、大體上右に述べしが如きものであるが、彼は彼自身の哲學と觀念論及び唯物論との關係に就ては、

「哲學の第一諸原理」の終りに左の如くに述べて居る。

「現象秩序と本體秩序との間の結び付きは、永久に詮索され難きものである。かくて存在の制約されたる諸形態と、存在の無制約的形態との間の結び付きは、永久に詮索し得られないものである。物質、運動及び力の言葉に於て、一切の現象を解釋すると云ふことは、つまり吾人の思惟の複合的な諸記號を、最も單純な諸記號に還元すると云ふこと以上の何物でもない。

そうして方程式が夫れの最低項に約された時も、記號はやはり記號であるに止まる。かくて本書に於て述べ來れるもろくの論究は、物 (things) の究極的性質に關する敵對的な諸假説の何れにも支持を與へない。其等のもろくの論究の意味することは、唯心論的(或は觀念論的)であるより以上に唯物論的でなく、又唯物論的であるより以上に、唯心論的でない。見掛上右の二假説の何れかを支持する何れの論辨も、他を支持するに同様に有効な論辨によりて無効になる。唯物論者は感情の形式の下

で意識に於て存在するものは、力學的運動の一の等量に、かくて物質が現はす總ての他の力の等量に轉化し得られると云ふことは、相關關係の法則からの一の必然的演繹であるとして、意識の現象は物質的現象であると考へることが出来る。併し唯心論者は同じ與料から出發して、物質によりて發現されるものゝ力は、只其等の力が産出する意識の等量的分量の形態の下に於てのみ認識され得るのであるならば、其等の力は意識の外に存在する時でも、意識の中に存在する時と同一の本質的性質を有するものにして、かくて外界は吾人が心と稱するものと、本質的に同一である或物から成立すると見る唯心論的外界觀は、正當であると推論する可きことを、同等の論勢を以て論辨し得るのである。明かに外界の諸力と内界の諸力との間の相關關係及び等量化の立説は、兩者の何れかを、吾人が兩者の何れから出發するかによりて、他と同化する様に使用し得られる。併し本書に於て論述されて居る學説を正當に解釋する人は、其等の兩者の何れも終極的なものと認め得られないことを覺るであらう。かくる人は、主觀と客觀との關係は、精神と物質との對立的把握を吾人に對して必然的とならしめるとは云へ、一は他と同等に、兩者の根柢に存する不可知的實在の單なる一記號として、認めらる可きものなることを、覺るであらう。」

右に引用せるスペンサーの言述によりて、彼自身は精神と物質との兩者の何れも原本的或は根源的な實在ではなく、根源的實在は兩者の根柢に存する不可知的實在であつて、精神と物質とはつまり其の不可知的實在の生成或は進化の過程に於て現はれ、吾人が認識し得る二つの根本的現象であるとして考へて居たことが學ばれる。かくて彼の哲學は、形式的には第三根本方針を發展させて居るものと見做し得られるのである。併し彼はさきに述べし如くに、一切の學問的思惟の基本的前定、或は不可知的實在の生成の先天的眞理は、物質の不滅、運動の持續及び力の保存であると考へて居たことから推して、彼が最根源的實在として指定せる不可知的實在は、結局は少なくともより多く物質的なものであることが察知されると思ふ。さればエンゲルスが「ウトピーから科學への社會主義の發達」の英譯本に加へた「史的唯物論に就て」に於て、不可知論は「羞しがりな」唯

物論に外ならぬものであり、不可知論者の自然觀は全く唯物論的であると云ひ、不可知論なるものはつまりカムフラージュされた唯物論に外ならないものの如く批評して居るのは、敢て不當ではないと思はれる。

私は近世哲學史上に於ける第三根本方針の發達に就ては、此處では只二三の代表的哲學に就てしか、尙ほ又甚だ簡單にしか、論述することは出来ないが、とにかく以上述べし處によりて、近世哲學史上に於ては第三根本方針は形式的には發展されて居るが、併し實質的には、結局は觀念論か又は唯物論かに、より多く傾くことによりて、嚴密にはまだ大成されて居ないことを指示したと思ふ。それで次に現代哲學に就て、やはり簡單に此問題を論述したいと思ふ。

### 三

今第三根本方針の問題から見て、現代哲學に於て先づ注目すべきは、生の哲學或は生命哲學の *Philosophie des Lebens, Lebensphilosophie* の發達である。そうして現代哲學に於て、生命哲學の占める地位が如何に重要であるかは、ミュラーフライエンフェルスが「第二十世紀の哲學」に於て、現代に於ける哲學的思惟の二つの主要部類として、學問哲學と生命哲學と (*Wissenschaftsphilosophie und Lebensphilosophie*) を擧げて居ることによりても推察されるのであるが、尙ほ彼は現代哲學に於ては、如何に生命哲學が學問哲學を壓倒して發展しつゝあるかを、論證しようとする。私は生命哲學の意義に關しては同氏の所見を其のまゝに承認するものではないが、併して居る。

現代哲學に於ける生命哲學の發展の由來や、夫れの主要方針の分類に就ては、同氏の所論によりて教へられる處少なくないので、此處に第三根本方針の問題から見て、生命哲學の意義を究明せんとするに當つて、先づ同氏の所論の要點を述べて置きたいと思ふ。

ミュラー・フラインフェルスは先づ現代生命哲學の途を準備せる人々として、シヨペンハウエル、ニーチエ及びハールトマンをあげ、次に非合理的認識への發達の傾向を示すものとして現代の懷疑論、プラグマティズムス、フィクチヨナリズムス及び夫れ等のものと類縁を有する諸方針を考察し、次にもろくの非合理的認識可能性を示すものとして、マイエル、ゴムベルツ、デイルタイ、シュプランガー等の諸家の説、精神分析説、ベルグソンの説、神祕的直觀説、ラテナウの説、ハムマーヒアーの説等を考察し、夫れより現代生命哲學を生命或は生の非合理的形而上學（非合理主義的生命形而上學）と、生命の合理主義的哲學（合理主義的生命哲學）と、生命の文化哲學（文化哲學的生命哲學）との三方針に大別して、主要なる現代生命哲學者の學説の眞髓を簡單に説述し評價して居る。但し先づ生命の非合理的形而上學の方針に於ては、主としてベルグソン、ムジメル、ヤスパール、カイゼルリング、精神分析等の諸説が考察され、且つ著者自身の説が簡單に述べられて居り、次に生命の合理主義的哲學の方針に於ては、主としてドリーシュの説、プシコヴェイタリズムの諸説、ユリウス・シユルツ、及びツイグララーの説等が考察されて居り、終りに生命の文化哲學の方針にありては、文化を生命の生産物として、之を生物學的、心理學的、社會學的、歴

史哲學的に考究する諸説が考察されて居るのである。併し哲學の第三根本方針の問題から見て、此處に私が直接に特に重要視したいと思ふのは、例へばデイルタイやジムメルの如き、又其等の人々の方針に従ふて、主として精神的生命を考察する生命哲學者の諸説ではなくして、有機的或は生物的生命と精神的生命とを合せて考察し、生命を其の全體に於て究明せんとする生命哲學者の諸説である。しかも此處では其等の生命哲學者の諸説だけでも一々考察する暇はないから、只其中の最も重要なものの一、ベルグソンの哲學を簡單に評價するだけに止めて置きたいと思ふ。

私は此處では勿論、ベルグソンの生命哲學の全體に就て考察しようとするのではなく、只哲學の第三根本方針の問題から見て、特に注目すべき點に就て、彼の生命哲學の意義を極簡單に指示し、評價しようとするだけである。今ベルグソンの哲學は、精神と物質との根本的關係を如何様にか直接に決定しようとする、傳來の立場にとり代はる一の新しき立場を呈供するもの、哲學の一の新しき出發點を指示するものと云はれて居る。又彼自身は觀念論と唯物論との對立から離れ、精神と物質との對立以前の直接的具體的生命から、出發しようとするものであると言明して居る。彼の論ずる處によれば、吾人が吾人自身の生命の意識に於て有する實在の直覺は、吾人が外物を知覺する時に認識する他の實在とは、全く異なる實在の一種の把握ではなく、空間は一の實在にして、時間は他の實在であるのではなく、吾人が生命に於て直覺によりて知識する實在も、物理科學に於て悟性によりて知識する實在も、同一の實在である。即ち具體的な生命である。眞實

な實在としては只生命があるだけである。併し私の見る處では、ベルグソンの哲學も只直接には精神と物質との根本的關係を主要問題として居ないと云ふだけであつて、結局は此の關係の究明に歸着するもの、或は結局は此の關係を如何様にか決定しようとするものであると思はれる。尙ほ私の見る處では、一切の哲學體系はつまりは此の關係を如何様にか決定しようとするもの、又そうでなくは到底吾人の世界觀的要求を、根本的に満足させることは出来ないと思はれるのである。それで私は此の關係から見て、つまりは第三根本方針の問題から見て、此處にベルグソンの哲學の根本的意義を考究したいと思ふのであるが、紙面の都合上極簡単に論述するだけに止めざるを得ない。

哲學の第三根本方針の問題から見て、ベルグソンの哲學の根本的意義を批判的に考察するに當つて、最とも重要視する可きは、云ふまでもなく、彼が唯一の眞實在と觀する生命なるものは如何なるものであるかと云ふ問題である。少し詳しく云へば、彼が唯一の眞實在と觀する生命なるものは、精神と物質とを総合する根元的統一體として、より多く精神に偏することも、亦より多く物質に偏することもなく、眞に兩者を對等な實在として総合する根元的統一體であるか、即ち私が哲學の第三根本方針の實在觀として、ある可きであると考へるが如きものを意味するのであるか、又は然らずして、やはりより多く精神的性質を、或はより多く物質的性質を具有するものであるかと云ふ問題である。そうして今かゝる問題を呈出して、ベルグソンの唯一眞實在として

の生命の性質を究明しようとする、私は彼の云ふ生命なるものは、結局はやはりより多く精神的性質を具有するものにして、私が第三根本方針の實在觀として、ある可きであると考へるが如き根元的實在を意味するものではないと、思はれるのである。

ベルグソンが唯一眞實在と觀する生命なるものは、より多く精神的性質を具有するものであることは、哲學上の諸問題に關する彼の論述に於て指示し得られると思はれるが、此處では詳しく論述する紙面を有しないから、只極簡單に右の點を指示するだけに止める。

先づベルグソンは、物質とは如何なるものであると考へたかを考察するに、彼の論ずる處によると、吾人が吾人の注意を吾人の最も深奥な經驗に集中する時は、吾人の生命の實在を、夫れに於ては過去が記憶として現在の中に存在し、吾人の意志の全活動を未來に押し進める一の純粹持續として知覺する。處で吾人の實在の中に、現實に現在的な瞬間を示す一點、鋭き一點がある。そうして吾人は吾人の存在を其の一點に集中し、一切の記憶及び一切の意志を排除しようと、如何に努力するとも決して完全に成功することは出来ないが、しかも一切の現實性が集中する其の純粹な現在の實在を瞥見することが出来る。其の純粹な現在の實在は、夫れの中に之を過去に結び附ける記憶が全く存在せず、又之を未來に押し進める意志が全く存在しない時には、絶へず或は限りなく死し又再生する一の瞬間的實在として現はれるであらう。そうして物質が固定せる、外部的な、無時間的な諸狀態として實存するのは、即ち其の點に於てある。吾人若し其の瞬間的實存を觀することが出来たならば、夫れが吾人の觀す可き純粹物質性であるのである。要するに生命は夫れが作用しつゝある其の點に於て物質化するのである。其の點に於て變化しつゝある流動は、固形的な外部的な諸狀態を裝ひ、そうして其の狀態に於て實在を把握するのが、知力の本質的機能である。かくて吾人の知力は空間に於ける延長の形態に於て物質を認識する能力にして、科學は知力の作業である。併し如何にして究極的實在は一運動であり得るか、如何にして一運動が無限の差異を生じ得るか、如何にして死物質が生命と同一の運動であり得るか。一の運動の逆は其の運動の單なる中止によつて生じ得る。そうして意志の創造的作用の如き運動、一の目的に集中されて居る運動は、一の緊張として考へられるとすると、如何なる仕方にも於て生ずるにせよ、夫れの中止



は一の抑留である。かくて物質、即ち空間に於ける延長は、つまり生命に於ては時の流れに於ける一の純粹持續である其の運動の逆、即ち中止である。更に運動の分散は其の運動の目的を妨げる一の反對運動として作用し得る。かくの如くにして物質の發生は、生命の運動の本性の中に含まれて居ると云ひ得られる。要するに物質は一の下る運動、エネルギーの分散、退化にして、之れと對立して生命は一の上る運動である。生命的活動は自から己を破壊する一の作用或は實在を通じて、自から己を創造する一の作用或は實在である。

實在の原理は何處にありても同一である。そうして此の原理は創造の欲求に於て現はれる生命或は意識である。吾人若し其の究極的實在を神と稱するならば、神は不斷の生命、活動、自由である。

生命の流れは人間以外の何處にありても、夫れに對抗する死物質の重壓によりて押し返されて居るが、只人間に於てのみ自由に行進して居るのである。換言すれば生命の原動力は創造の欲求であると見るに於ては、詳しく云へば生命自身の運動の反對方面であり、又自由に對する必然として生命に對立する處の物質に妨げられつゝ、自由を實現せんとする一の努力であると見るに於ては、或は其の努力、奮闘に於て自由の出來るだけ大なる分量を物質の中に移入せんとする生命の努力を認めんとするに於ては、只自由な創造的活動をなし得る人間に於てのみ、生命の運動が其の目的を達したと云はねばならぬ。しかも其の目的達成たるや完全なものでなく、甚だ制限されて居るものである。抑々生命の運動が、吾人に於て大に發達して居るのは、只夫れの意識的活動の一形態、知力に於てだけである。吾人は著しく知力的である。そうして吾人の成就したのとは異なる或進化は、より大なる直覺的意識に、或はより多く完全な人間に於ける知力及び直覺の大なる發達に、導いて行つたかも知れない。吾人にありては直覺は殆んど全く知力の犠牲に供せられて居る。處で哲學が精神的生活の統一性、知力及び夫れが吾々を結び附ける物質性よりもより廣大な生活を、吾々に啓示する爲めに捉へるのは、即ち此の直覺であるのである。かくて哲學は吾々を精神的生命に導いて行き、吾々自身の人格的生命的直覺に於て、記憶と意志とが自由に活動する現在を形成する眞實持續を顯示し、物質が存在する精確な點、過古が將來に入り込みつゝある其の點、記憶及び意志から抽象すれば全く存在を有しない一點を、吾々に指示するのである。同情的洞見によりて、吾人は吾人の持續が、宇宙の全實在と一であることを覺る。吾人は、宇宙は現實であるならば、夫れはつまり絶へず持續し、生成する一の意識として生存すると云ふことを、意味するものに外ならないことを覺る。此の宇宙的生命に對しても、吾々の個人的生命に對すると同じく、物質は只運動が創造しつゝある處にのみ存在する持續性を有しない瞬間點であるのである。

簡單ながら、又やゝ斷片的であるが、以上述べしベルグソンの思想によりて、彼は物質とは如何なるものであると考へたか、又夫れに結び附けて彼が根元的眞實在と觀する生命或は生を、結局如何なるものと考へたかを、少なくとも大體上學び得られるが、要するに彼が根元的眞實在と觀する生命或は生なるものは、本來物質的性質よりもより多く精神的性質を具有するもの、否な結局は精神的なものと認められねばならないかと思はれるのである。かくて私は彼の哲學も、吾々が第三根本方針として要求するものを、まだよく與へて居ないと考へる。但し彼の哲學が第三根本方針の確立に貢獻する處大なることは、云ふまでもない。

却説私は現代哲學に於ては、先づ生命哲學或は生の哲學に就て、第三根本方針の問題から考察したる後、更に現象學的哲學と生命哲學とを融合する最新の哲學の發達を、特にマックス・シェラー及びハイデッガーの哲學に就て、やはり第三根本方針の問題から見て考察し、終りに我日本民族が現代哲學に貢獻しつゝある處の、少なくとも今日までの處では、唯一の偉大なる哲學と認められて居る、畏友西田幾多郎博士の「西田哲學」を考察したつもりであつたが、最早豫定の紙面が残り少なくなつたから、他日の機會に譲りたいと思ふ。但しマックス・シェラーの哲學に就ては、本雜誌に於て次に公にしたいと思ふ「第三史觀の根本原理」中に少しく論ずることとする。そうして最後に、私が哲學の第三根本方針と稱するものに就て今日、私自身の抱いて居る考へを、少しく述べて置きたいと思ふ。

#### 四

私は前論文中に述べし如く、先づ哲學の二つの根本的方針として、從來一般に承認されて居るが如くに、觀念論と唯物論との相對立する二方針を承認し、そうして此等の二方針はつまり夫れ夫れ相對立する一定の世界觀的人格典型、即ち觀念論的人格典型及び唯物論的人格典型を基礎として發展するもの、或は夫等的人格典型から産出されるものと考へるのであるが、併し夫れと同時に、哲學の根本的方針、從ふて又夫れの基礎としての世界觀的人格典型は、只右の二種だけに限られて居るのでなく、論理的に考へても、亦哲學史に就て考察しても、更に右の二種の根本方針を總合せんとする第三の根本方針、及び夫れの基礎としての第三世界觀的人格典型が可能であると思ふのである。かくて私は本論文に於て上に述べし如くに、甚だ簡單であるが、又あまり組織的でもないが、とにかく近世哲學史及び現代哲學に就て、第三根本方針の可能性を指示したのであるが、併し夫れと同時に指示せる如く、第三根本方針に屬すると思はれる何れの哲學も、結局はより多く觀念論に傾いて居るか、又は唯物論に傾いて居るかであつて、私が嚴密な意味にて第三根本方針と稱するものは、まだ確立されて居ないと思はれるのである。從ふて私が嚴密な意味にて第三根本方針と稱せんとするが如き方針を、新たに組織的に確立することは、今後の哲學上の最とも重大な根本的一問題であると考へるのである。しかも悲しいかな、哲學の専攻者でない私は、此の問題の考究に於て、現代生命哲學や、現象學的哲學と生命哲學とを融合せんとする最

近の哲學や、殊に我國の西田哲學によりて、大に教へられる處あるに拘らず、自から此の問題を、少なくとも今日では、満足に解決する力を有しない。されば此の問題の満足な解決に就ては、私は全く哲學專攻者に依頼せねばならないのである。

抑々哲學專攻者でない私が、かゝる哲學上の重大な問題を呈出するに至つたのは、勿論哲學其物の研究上からではなく、私の社會學方法論上からである。私は科學として社會學を建設することが、現代の社會學者の最も重大なる任務であると信ずると同時に、夫れが爲めに社會哲學を排斥するのは正當でないと思ひ居る。更に科學としての社會學は、社會哲學と相伴なふて始めて正當に建設されるので、社會哲學を排斥して、只科學としての社會學のみを建設せんとする企だては、總て結局は社會學を社會哲學化するに至るものであるとも考へて居る。かくて私は科學としての社會學を建設すると同時に、社會哲學を建設せんと努力し、又かくすることによりて、始めて科學としての社會學を正當に建設することが出來ると信じて居るのである。然るに今社會哲學或は歴史哲學の建設に於て、最もも根本的な一問題となるのは、社會生活に於ける精神的因素と物質的因素との關係である。そうして物質的因素を精神的因素に還元して社會生活を究明し評價せんとする觀念論的社會哲學或は歴史哲學(觀念史觀)も、亦精神的因素を物質的因素に還元して社會生活を究明し評價せんとする唯物論的社會哲學或は歴史哲學(唯物史觀)も、共に私の社會哲學的或は歴史哲學的要求を満足させることが出來ないが爲めに、私は其等の兩因素は何れも他に

還元されない、夫れ夫れ獨立なものであると同時に、甚だ密接に相互的に作用し合ふものであると考へるに至つたのである。併し兩因素は何れも他に還元されない獨立なものであるとしても、密接に相互的に作用し合ふものである以上、根本的には兩因素を總合する根元的な或物が存在すると、認めなければならぬ。換言すれば、兩因素は根元的な唯一眞實在の根本的分化にして、かくて密接に相互的に作用し合ふのであると考へざるを得ない。是れ即ち私の第三史觀の根本思想であるのである。併しかゝる第三史觀が建設し得られる爲めには、其の哲學的基礎として私が哲學の第三根本方針と稱するが如きものが確立されねばならない。私は此の如くに推論して、哲學の第三根本方針の問題を呈出するに至つたのである。そうして上に述べし如くに、かゝる根本方針の可能なることは、論理的に考へても、亦哲學史に就て考察しても、明かに了解されると思ふが、しかも哲學專攻者でない私は、自分の力でかゝる根本方針を十分に確立することは出来ないから、其の確立に就ては偏へに哲學專攻者の教へを乞はんとするのである。

以上述べ來れる處によりて、私が嚴密な意味にて哲學の第三根本方針と稱するものは、如何なるものであるか、又かゝる根本方針は如何にして可能であるかを、大體上指示したと思ふが、更に私はかゝる根本方針の可能性の最とも根本的な基礎を探究して、觀念論的方針がつまりは觀念論的人格典型を基礎として可能であり、又唯物論的方針がつまりは唯物論的人格典型を基礎として可能であるが如くに、第三根本方針もつまりは第三世界觀的人格典型を基礎として可能である

と考へるのである。要するに私は觀念論的人格典型から發展する觀念論の方針に基いて、觀念史觀或は觀念論的歴史哲學が建設され、又唯物論的人格典型から發展する唯物論の方針に基いて、唯物史觀或は唯物論的歴史哲學が建設されるのと同様に、第三世界觀的人格典型から發展する第三根本方針に基いて、第三史觀が建設されると考へるのである。本論文及び前論文「第三史觀の可能性」に於て論述せることは、哲學上の甚だ重大な根本問題を出来るだけ簡單に論述せんとしたが爲めに、尙ほ又此の問題に關する私の思想はまだ未熟であるが爲めに、私の所期を十分論證することは出来なかつたかも知れないが、とにかく私は大體上上述の如き思想を哲學的基礎として、私の第三史觀を建設せんと企だてゝ居るのである。それでやはり本雜誌に於て公にしたいと思ふ次の論文「第三史觀の根本原理」に於て、私の第三史觀の若干の根本原理を、やはり簡單に論述することとする。